

## 『イエスさまvs群衆』 ヨハネ6:1-15

- 6:1 そののち、イエスはガリラヤの海、すなわち、テベリヤ湖の向こう岸へ渡られた。
- 6:2 すると、大ぜいの群衆がイエスについてきた。病人たちになさっていたしるしを見たからである。
- 6:3 イエスは山に登って、弟子たちと一緒にそこで座につかれた。
- 6:4 時に、ユダヤ人の祭である過越が間近になっていた。
- 6:5 イエスは目をあげ、大ぜいの群衆が自分の方に集まって来るのを見て、ピリポに言われた、「どこからパンを買ってきて、この人々に食べさせようか」。
- 6:6 これはピリポをためそうとして言われたのであって、ご自分ではしようとするのを、よくご承知であった。
- 6:7 すると、ピリポはイエスに答えた、「二百デナリのパンがあっても、めいめいが少しずついただくにも足りませんまい」。
- 6:8 弟子のひとり、シモン・ペテロの兄弟アンデレがイエスに言った、
- 6:9 「ここに、大麦のパン五つと、さかな二ひきとを持っている子供がいます。しかし、こんなに大ぜいの人では、それが何になりましょう」。
- 6:10 イエスは「人々をすわらせなさい」と言われた。その場所には草が多かった。そこにすわった男の数は五千人ほどであった。
- 6:11 そこで、イエスはパンを取り、感謝してから、すわっている人々に分け与え、また、さかなをも同様にして、彼らの望むだけ分け与えられた。
- 6:12 人々がじゅうぶんに食べたのち、イエスは弟子たちに言われた、「少しでもむだにならないように、パンくずのあまりを集めなさい」。
- 6:13 そこで彼らが集めると、五つの大麦のパンを食べて残ったパンくずは、十二のかごにいっぱいになった。
- 6:14 人々はイエスのなさったこのしるしを見て、「ほんとうに、この人こそ世にきたるべき預言者である」と言った。
- 6:15 イエスは人々がきて、自分をとらえて王にしようとしていると知って、ただひとり、また山に退かれた。

## ●序論

5:5 イエスは目をあげ、大ぜいの群衆が自分の方に集まって来るのを見て、…ピリポに言われた、「どこからパンを買ってきて、この人々に食べさせようか」。

迫りくる大勢の群衆とイエスさまが対決したという意味ではありません。

大勢の群衆を前にしたイエスさまが何をなされたか…、そこに注目します。

6:11 そこで、イエスはパンを取り、感謝してから、すわっている人々に分け与え、また、さかなをも同様にして、彼らの望むだけ分け与えられた。

その光景を想像するだけでも、読み流すことのできないほどの奇跡です。

このことが事実あったから群衆は、イエスさまを「来るべき預言者」と思い、また福音書記者がこぞって書き残したのだということをわたしたちは覚えていたいのです。 ま

さに、神わざがそこにあったのです。

## ●本論

### I. ここで信仰の応答が試されている

6:5 イエスは目をあげ、大ぜいの群衆が自分の方に集まって来るのを見て、ピリポに言われた、「どこからパンを買ってきて、この人々に食べさせようか」。  
6:6 これはピリポをためそうとして言われたのであって、ご自分ではしようとするのを、よくご承知であった。

イエスさまは、この実際の場面でピリポをテストをしたということです。  
イエスさまもしばしば弟子たちに問いかけることで、彼らの福音理解、そしてイエスさま理解が試しておられます。

イエスさまからの代表的なテスト、質問がありますね。

「それでは、あなたはわたしをだれと言うか」。

シモン・ペテロは答えて言った、「あなたこそ生ける神の子キリストです」（マタイ16:15-16）

さて、イエスさまと弟子たちの間でいくつもなされるテストというものは、彼らが、弟子として成長するために必要なものでした。

それは決して弟子としての合否を下すためのものではありません。

今、できた、できなかったという評価で終わるものではなく、それによって「成長させていただく」ためのものです。

自分の理解が確認できる、深められる、その理解が誤っていた場合には、それに気づかされ、正され、成長することができるのです。

ここで改めてを皆さんに呼びかけたいのです。

「イエスさまの弟子になりましょう」と。

これはイエスさまの皆さんへの招きです。

その弟子として成長するプロセスで経験するのが、問いかけ（テスト）です。

ピリポは目の前の群衆を見、そして手元にあるお金を見て、冷静に状況・環境、さまざまな物事を分析して答えを出しました。

6:7 すると、ピリポはイエスに答えた、「二百デナリのパンがあっても、めいめいが少しずついただくにも足りませんまい」。

とても賢い。そういうピリポにイエスさまは尋ねたことに意味がありあます。

それは、ピリポが、共におられるイエスさまから目を離して「足りない」という答えを出したからでした。

続きにアンデレのことも記されています。彼は2匹の魚と5つのパンを持っている少年を紹介した上で、…強い確信が持てなかったのでしょう、

:9 「…しかし、こんなに大ぜいの人では、それが何になりましょう」。

共にいるイエスさまに求めることに思いへと至らない。そこにわたしたちの経験や知恵や賢さが障害となってしまっているのです。

このテストは、「そういう状況を目にしても、イエスさまへの信仰があるかどうか…」でした。

それが、信仰の成長の糧となり祝福と変えられていることを今見ることこそ、大切なことなのです。

## Ⅱ. イエスが群衆になさること見る

6:10 イエスは「人々をすわらせなさい」と言われた。その場所には草が多かった。そこにすわった男の数は五千人ほどであった。

6:11 そこで、イエスはパンを取り、感謝してから、すわっている人々に分け与え、また、さかなをも同様にして、彼らの望むだけ分け与えられた。

群衆の幸いは、お腹いっぱいになることができたことはもちろん、イエスさまを通してなされた御業を体験することができたことでした。

また弟子たちの幸いは、イエスさまのその言われるとおりにしていくとき、自分たちはそこで、その奇跡に仕えることができたということです。

たった2匹の魚と5つのパンだけだったはずのものが、どんどん増えていく。どんなに弟子たちも人々も興奮したことでしょう。

それは結果、「足りない」どころか「望むだけ分け与えられ」そして余るほどでした。

6:12 人々がじゅうぶんに食べたのち、イエスは弟子たちに言われた、「少しでもむだにならないように、パンくずのあまりを集めなさい」。

6:13 そこで彼らが集めると、五つの大麦のパンを食べて残ったパンくずは、十二のかごにいっぱいになった。

ここに象徴的な福音のメッセージを見ることができます。

イエスさまに従うならば、そこに2匹の魚と5つのパンしかなくても、全ての人の腹を満たしつくすほどのものとなるということに見えるのです。

「神はキリストを通してみもとに来るものを、皆、赦して下さいます」。

わたしたちがゆだねられている福音は、イエスさまを信じ、受け入れる者すべてに救いをもたらす神の力であるとの証です。

ローマ1:16 わたしは福音を恥としない。それは、ユダヤ人をはじめ、ギリシヤ人にも、すべて信じる者に、救を得させる神の力である。

## Ⅲ. 群衆の思いとイエスさまの思い

6:14 人々はイエスのなさったこのしるしを見て、「ほんとうに、この人こそ世にきたるべき預言者である」と言った。

6:15 イエスは人々がきて、自分をとらえて王にしようとしていると知って、た

だひとり、また山に退かれた。

腹いっぱい飯を食わせてくれる王様が一番。

彼らにとって今見た奇跡をもってこの人ならば間違いない…という思いに駆られてイエスさまを捕らえて王にしようとしています。

ただそれはイエスさまの思いとは異なりました。

だからイエスさまは「ただひとり、また山に退かれた」のです。

何のためでしょうか？並行記事にはこうあります。

「そして群衆に別れてから、祈るために山へ退かれた」(マルコ6:46)

しばしば人に推されて、それを栄誉として人々の上に立つという人がいます。しかしイエスさまは、そこから遠く離れたのです。

「わたしは人からの誉れを受けることはしない」(ヨハネ5:41)

イエスさまは祈るために、つまり父なる神さまとの交わりの中に入り、そこで、ご自分のなすべきこと、成すべき使命に生きる力を得ています。

それは、人を救うために、ご自身のいのちをささげる者となることです。

人からの評価や誉れは、特に気をつける必要があります。

それがあつために、神さまの御声が自分になすべきことがぼやけて、ゆがめられてしまうこと、御言葉を聞き損ねることさえあるからです。

そうならないためにはどうしたらいいのでしょうか。

イエスさまに倣い、わたしたちもまた御言葉と祈りの中で、神さまの親密な交わりの中に入ることはないのでしょうか。

最後に)

「vs群衆」の中にあつて弟子たちが受ける最大のテストは、この後、イエスさまがとらえられ、十字架にかけられて殺される時においてでした。

彼らはそこでも、そのイエスさまを前にテストでつまずいていました。

しかし、ここでも覚えていただきます。彼らは、その主の十字架を通る経験で、失敗して、それで終わったのではありませんでした。

復活されたイエスさまは、彼らにご自身を表し、彼らを回復して下さったのです。

弟子たちはそのテストでの失敗があつて、その上でイエスさまの愛と恵みによって変えられたのです。

さらに聖霊が、ひとりひとりのうちに臨み、彼らは神の力に満たされて変えられていったのです。

まさに彼らは、リバイバル(信仰の復興)を経験しました。

そのところから彼らは、自分たちの能力や自分たちの知識や経験が第一ではなく、まずイエスさまを頼りにして求めて祈る者、そしてみことばに従って生きる者へと変えられていったのです。